

④7 歳旦三物俳諧摺

歳旦

寝る丈はねて眼の覚て御代の春

枝もならさず吹わたる東風

も、千鳥囀るのみて隙もなし

春興

月かけも水も流れて梅の花

葉よりは長う伸し芹の根

出代りの手透に灸もすゆるらん

歳暮

後去りもならず成けり大晦日

冬をはなる、門の足音

いさみ立駒にかさりの鞍置て

ともく、に身をいれて鳴蛙かな

行もとりうしろ吹る、柳哉

手紙にもはや書かぬる余寒かな

辛未春

苔堂書 印印

壮山

士國

漸風

士國

漸風

壮山

漸風

士國

壮山

漸風

士國

壮山

仙台

彫栄

ゆれなから咲たやうすやゆりの花

松ひと木こ、そとつかふ扇かな

只ひとりのこりてさひしす、み台

会津

池水

夕たちや見かけて遠き渡し小家

夕たちのはれ間をとふや鷺一羽

今ふいたあやめを伝ふ霰哉

行々子なくや灯とほすとまり舟

笠とりにもとる人あるあつさかな

月の出て川へわたすやす、み台

鳴はかり何の能なし行々子

福島

山石

若竹や日にくかはる風のおと

よこにふる雨を背おふて田植かな

船の火のほつかり見えて風かをる

ひと声はたしなきものそほと、きす

暮る間のはれやほたるの草はなれ

うつくしう雨のふるなり蓮の花

明やすき夜の夢をしくおもひけり

辞義もせぬうちに言出すあつさ哉

露の身や露をはなれてとふ蛭

かけそひてさそひ出しけり江の蛭

茂りあふ木をかたとりてす、み台

戦く木のみなおちついて雲のみね

杜若傘さしかけてきる日かな

明る戸や青田へはしる焚火かけ

あとに見る花数うれし初茄子

草々をさし出てさくやゆりの花

そよきたひのひる風情や青す、き

立きはにまたのみ直す清水哉

手をそへて見ても牡丹のちる日哉

岸による汐なとふんて夕す、み

夕す、み月をのこして帰りけり

炎天やまとめてほしき松の声

白蓮に古ひた杭のかくれけり

あるきよく砂はしめりて夏の月

ついて居て掃せる庭のほたにかな

三春

睦蝶

馬山

貴桃

剪雪

秋瓢

為心

泰甫

山石

花霰

柳城

錦雪

花好

一水

松橘

氷雪

柳壺

一真

花明

古夕

宗英

郡山

花明

古夕

宗英

柳壺

花明

古夕

宗英

柳壺

花明

福島

山石

泰甫

為心

秋瓢

剪雪

貴桃

睦蝶

馬山

貴桃

剪雪

秋瓢

為心

泰甫

山石

花霰

柳城

錦雪

花好

一水

松橘

氷雪

柳壺

一真

花明

古夕

宗英

露やおく夏枯草を見るにつけ

爲山

少女